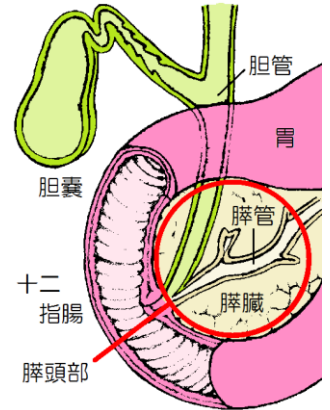


問1.【受診勧奨】医療機関への受診が必要かどうかを振り分ける。〔答:すべて〇〕

(1) ①胃がんのおそれ。罹患率は40歳代後半から増加する。幽門部付近にできて食べ物が流れなくなった例で、もどすこともある。出血による貧血や黒色便、体重の減少に要注意。胃ガンの症状は胃炎や胃潰瘍でもみられ、早期にはほとんど無自覚なので定期的に検診を受けることが重要。喫煙、塩分の多い食品の取りすぎや野菜・果物の摂取不足、ピロリ菌の持続感染等が主な原因になる。

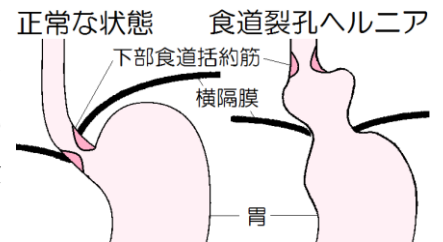
②膵臓がんのおそれ。膵臓にできるガンは90%以上が膵管の細胞にできる膵管ガンで、膵臓ガンといえば、通常この膵管ガンを指す。早期の膵臓ガンに特徴的な症状はないので、進行してきて起きる症状と膵臓ガンに比較的特徴的な黄疸*の症状を示した。黄疸は膵頭部にできたガンが胆管を詰まらせることで起こる。体重の減少もよくみられる。膵臓ガンができると、糖尿病を発症することもある。罹患率は60歳ごろから増加し、危険因子として糖尿病、慢性膵炎、肥満、喫煙などがあげられる。



*: 体がかゆくなったり、尿の色が濃くなったりもする。胆石や肝炎が原因の場合もある。

(2) ①肝硬変のおそれ。他にも便秘・下痢、貧血、こむら返り、皮下出血、浮腫、微熱、黄疸、尿の濃染等があらわれる。肝炎ウイルス（主にB型,C型）の持続感染、アルコール、非アルコール性脂肪性肝炎等によって壊れた肝臓を、修復するうちに線維が増加して肝硬変になり、肝ガンへと進展する。また肝硬変が進むと意識障害を起こしたり、門脈の流れが悪くなることから食道や胃に静脈瘤ができ、破裂すると大量の吐血や下血が起こる。肝臓のガンは、肝臓の細胞がガンになる「肝細胞ガン」、胆管の細胞がガンになる「胆管細胞ガン」等の「原発性肝ガン」と、別の臓器から転移した「転移性肝ガン」に大別でき、日本では肝ガンといえば肝細胞ガンを指す。

②胃食道逆流症のおそれ。食道と胃のつなぎ目には下部食道括約筋という筋肉があり、この筋肉が食道の下部分を締め付けるので、逆流せずにすむ。ところが胃に食べ物がたまってくると、この下部食道括約筋が緩んで、胃内部の空気を外へ出そうとする。これがげっぷで、このとき胃にたまった胃酸も逆流することがあり、この逆流が頻繁に起こることが胃食道逆流症の主な原因。非びらん性胃食道逆流症では食道粘膜が通常より過敏になっているために少しの胃酸でも敏感に反応して胸焼けなどの症状が起こる。非びらん性胃食道逆流症では、食道のぜん動運動などの機能の問題や、精神的な原因の場合も。



③つわりのおそれ。hCG産生腫瘍等でも擬陽性を呈することがあるので、陽性なら受診するよう記載されている。また、この時期は、胎児が薬物の影響を受けやすいので、妊娠中の症状を効能・効果に持たない医薬品の使用は避ける。「つわり」の効能・効果は、半夏厚朴湯、小半夏加茯苓湯、乾姜人参半夏丸等にある。妊娠は、最終月経初日から数えて4週間ごとに1か月と数え、つわりは一般的に妊娠2カ月目くらいから症状があらわれる。

④うつ病のおそれ。体の不調：睡眠障害や疲労感・倦怠（けんたい）感、首・肩のこり、頭が重い、頭痛など心の不調：意欲・興味の減退、仕事能力の低下、抑うつ気分、不安・取り越し苦労など。

⑤胃不全まひのおそれ。主な症状として、食後の胃もたれ、早期満腹感、胃痛などに加えて、吐き気やおう吐を訴える患者さんが多いのが胃不全まひの特徴。さまざまな要因で引き起こされるが、1番の要因は糖尿病。

問2.【一般用医薬品でも対応できる消化器の症状】〔答:①B, ②C, ③A, ④E〕「機能的胃腸症」は、検査しても異常がないのに、食後の胃もたれ感、少ししか食べていないのにおなかが苦しくてそれ以上食べられない、食事とは関係なく胃が痛い、胃のあたりが灼けるように感じるといった症状が起こり、OTCを使う機会がある。

『きょうの健康大百科』によると、六君子湯は、血管の筋肉を弛緩させる「一酸化窒素」に働きかけて胃壁を柔軟にし、更に排出機能を高めたり、食欲刺激ホルモンを活性化して食欲不振を改善したり、胃の血流を促して胃の粘膜を保護する効果もあるという。一方、黄連解毒湯にはプロスタグランジンなどを増やす働きがあり、胃腸の潰瘍は西洋医学による治療が向いてはいるものの、小腸潰瘍の予防や進行防止に効果的だという。

問3.【胃腸薬の主作用の特徴】

(1) 〔答:①D, ②A, ③E, ④B, ⑤C〕F. ジアスターゼ：でんぷんを分解する酵素アミラーゼの俗称であるが、本剤は麦芽を原料とする植物アミラーゼに属し、でんぷんに作用する。

(2) [答:①D, ②C, ③F, ④A, ⑤E] B. 人参湯(理中丸): 体力虚弱で、疲れやすく手足などが冷えやすいものの次の諸症: 胃腸虚弱、下痢、嘔吐、胃痛、腹痛、急・慢性胃炎

G. 半夏厚朴湯: 気分がふさいで、咽喉、食道部に異物感があり、ときに動悸、めまい、嘔気などを伴う次の諸症: 不安神経症、神経性胃炎、つわり、せき、しわがれ声、神経性食道狭窄症、不眠症

問4. 【患者情報確認・生活スタイル】 [答:①H, ②B, ③C, ④D, ⑤A, ⑥F, ⑦G, ⑧E, ⑨I]

①【抗コリン成分】 胃腸鎮痛鎮痙薬には「胸やけ」の効能・効果を書ける。その主薬なのだが逆流は起きやすくなる。

②【ピロリペピソム塩酸塩水和物】 ムスカリン受容体に対して、選択的に拮抗し、攻撃因子を抑制する。そのため、従来の抗コリン剤と異なり瞳孔、心拍数、胃腸管運動、排尿などにほとんど影響することなく、酸分泌を特異的に抑制することより、比較的安全な効果を有する薬剤であるといえる。(医療用ガストロゼピン錠のI.F.より) 妊娠との関係では、医療用の添付文書に「治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。[妊娠中の投与に関する安全性は確立していない。]」とある。オキセサゼインも同様。一方、アミノ安息香酸エチル、ゲファルナート、ブチルスコポラミン臭化物、セトラキサート塩酸塩、ソファルコン、テプレノン、トリメブチンマレイン酸塩、パパペリン※、チキジウム臭化物、トロキシピドも医療用では同様の記載だが、「相談すること」になっている。ロートエキスは「相談すること」になっているが、医療用では、胎児又は新生児に頻脈等を起こすことがあるので、「投与しないことが望ましい」とされる。

※パパペリンに限り、理由部分のみ記載されており、投与と判断については触れられていない。

③【カルシウム】 胃腸薬に記載されている。医療用の添付文書には「妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないことが望ましい。[動物実験(ラット)で妊娠前及び妊娠初期の大量(2,000mg/kg/日)投与により胎児毒性(胎児吸収)が報告されている。]」とある。

④【ロートエキス】 母乳に移行して乳児の脈が速くなることがある。授乳に関して医療用では以下のとおり。

「母乳中に移行する」: ジサイクロミン塩酸塩(人で)、ソファルコン(ラットで)、トロキシピド(ラットで)

「安全性が確立していない」: チキジウム臭化物、トリメブチンマレイン酸塩

ジサイクロミン塩酸塩、チキジウム臭化物は「相談すること」、他は現在ロートエキスとの配合剤しかない。

⑤【カザウ(1日最大量原生薬として1g以上)】 偽アルドステロン症に備えた注意。ナトリウム及び体液貯留による浮腫、循環血流量増加による心・腎への負担増加及び血圧上昇、並びにカリウム排泄促進による血圧上昇、不整脈及び四肢麻痺等(ミオパチー)を招く。腎機能が低下している場合には、特に要注意。

⑥【アルミニウム塩】 蓄積によりアルミニウム脳症、アルミニウム骨症を起こすリスクが高いため。名前に「アルミ」を含まない合成ヒドロタルサイト、アルジオキサ、スクラルファートには要注意。

⑦【カルシウム塩】 高カルシウム血症のおそれ。医療用では甲状腺機能低下症又は副甲状腺機能亢進症の患者に禁忌。

⑧【セトラキサート塩酸塩】 本成分は代謝されて、抗プラスミン作用(血栓成分のフィブリンを溶解するプラスミンの働きを阻害する)を有するトラネキサム酸を生じるので、血栓を安定化させるおそれがある。

⑨【テプレノン】 これらにはまれに起こる重篤な副作用「肝機能障害」についての記載もある。一方、医療用の添付文書でも重篤な副作用「肝機能障害」の記載はあるが、肝臓病患者に対して禁忌や慎重投与にはなっていない。メーカーによると、セルベックス(テプレノン)には「その他の副作用」において「肝臓(0.1~5%未満)AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇」の記載があり、肝臓に負担をかけないわけではないと考えられるので記載。トリメブチンマレイン酸塩は、肝機能障害が起こった場合の既往症への配慮だとのこと。

ソファルコン、チキジウム臭化物の製剤にも重篤な副作用「肝機能障害」の記載はあるが、当該注意は無い。

問5. 【アドバイス】 [答:①○, ②×, ③○, ④○, ⑤○]

①子宮外妊娠や排卵日が後ろにずれた場合、hCG(ヒト絨毛性ゴナドトロピン)を十分検出できないことがある。

②健胃生薬が配合された胃腸薬の場合、味や香りを遮蔽する方法で服用されると効果が減弱することがある。

⑤重曹は一般用では長期連用禁止、医療用では投与禁忌。承認基準の重曹=炭酸水素Na 1日最大量は5g(2g/日未満の製品が多い)。1g中のNaは、食塩0.7gに相当。高血圧患者、慢性腎臓病患者の目標は食塩換算で6g/日未満。

参考にした文献: 問1 国立がん研究センター・がん対策情報センター・がん情報サービス(1)①胃がん、②膵臓がん、(2)①肝臓がん/その他(2)①国立国際医療研究センター肝炎情報センター「肝硬変」、②NHK健康チャンネル、日本消化器病学会が「ドライン」/③ドゥーテスト・hCGa 添付文書/ ④⑤NHK健康チャンネル/問2『機能性消化管疾患診療ガイドライン2014-機能性ディスペプシア』、NHK健康チャンネル、『試験作成に関する手引き』R4.3版/問3(1)『一般用漢方製剤承認基準の改正について』(2): 通知『胃腸薬製造(輸入)承認基準について』、医療用医薬品添付文書/問4: 通知『かぜ薬等の添付文書等に記載する使用上の注意の一部改正について』、医療用医薬品添付文書・I.F., 薬事日報社『一般用医薬品使用上の注意ハンドブック改訂版』/問5①ドゥーテスト・hCGa 添付文書, ②『試験作成に関する手引き』, ③『今日のOTC薬改訂第5版』, ④中医師の話⑤日本高血圧学会減塩委員会のページ